第31回 JACR
学術集会開催報告

第31回学術集会大会長
Tomonobu Koizumi
小泉知展
信州大学医学部附属病院

今回第31回日本がん登録協議会学術集会を長野県で、6月2～4日にかけてハイブリット形式で開催させていただきました。新型コロナ感染の終息は困難との判断に基づき、また過去2回の学術集会をWEB開催された第29回大会長大木いずみ先生や、第30回大会長田渕健先生などの助言を頂き準備させていただきました。また、プログラムや進行を支えてくれました理事の先生方や専門委員の皆様に多大なるご協力を頂き、感謝申し上げます。

開催形式が、直前に対面からハイブリット形式に変更になったにも関わらず、事前参加者数は324名、一般口演10題、ポスター発表38題の登録を頂きました。シンポジウムを含めて口演者には現地で発表・配信していただき、ポスター発表は、WEB上で紙面発表形式とさせていただき、さらに6月26日までオンデマンド配信も行いました。配信場所を信州大学医学部附属病院とし、即席の会場設定でしたが、業者さんのスピーディーな設定もあり“ある程度”の臨場感ある会場になったと自負しています。現地参加の理事の先生や演者にしてみますと松本駅からアクセスが少し悪くご迷惑をおかけしたかと思いますが、ご容赦ください。

さて、今回の学術集会のテーマを「利活用を目指すがん登録」とさせていただきました。シンポジウムでは、全国および院内がん登録の立場から利活用の実際と課題を発表していただき、また同日のセッションでは、各演者から個人情報保護と利活用のバランスをどうやってとるのかが重要である趣旨の発表がありました。私自身も、利活用といっても、研究者、自治体行政、または市町村単位への情報提供の内容も多彩で、利用目的も様々であって、一概に論じることは難しいと思い知らされました。一方で、実務者の方も、登録情報を収集・解析することが有効な情報になり、利活用につながることを考える機会になったのではと思います。実際、ポスター発表でも、実務者の“学術的な”発表内容が増えてきたように感じています。こういった活動が利活用への拡大につながり、がん登録は何のためのものかを我々自身が感じ取っていく必要があると思いました。J－CIP企画「社会に役立てるがん登録データ」ではJ－CIPの発足時の理念であるいろいろな立場からのがん登録データの利活用を通じた社会還元についてでした。

なお、学術委員の選出による最優秀口演賞には、O-1-1演題の杉山裕美さん、最優秀ポスター賞にはR-1-6演題の原加奈子さんが選出されました。がん登録関係者の益々の学術活動に期待したいです。

教育研修委員会企画の「がん登録実務者情報交換会　実務でGO」も今回継続開催できました。今いろいろな学会で、開催形式をめぐって意見があります。「リモートでも参加できる」「後からでも発表内容が閲覧できる」メリットと「開催費用の負担増」のデメリットも兼ね備えていますが、やはり「対面であの先生の話を聞けた」「対面で話し合えた」など本来あるべき顔合わせができる学術集会も意義があります。次回の学術集会は、青森県での開催です。青森大会の成功を心より祈念しております。